教育雑感

東大教授　勝田守一

一

東京都は、日本全国の人口のほとんど一割近くを収容している。この事実は、第二次大戦後の「地方分権」あるいは地方産業・文化の振興という方針にむしろ逆行して、実質的には「中央集中」が、とくに行政上にあらわれていることとならんで、経済界もまたそれに応じて「中央集中」の傾向を硬化していることを示している。

地方の文化および教育の振興もその傾向に押されて、どうにも動きがとれないほど掛声だけに終ってしまった。教育の面でいえば、地方大学が、それぞれ地方の政治・経済・文化の実態に即応して、それぞれの特色をもって発展していくことを理想としたのだが、その実はほとんどあがらず、むしろ戦前から伝統的に地方産業と結んでいた工業系統の大学にややこの傾向が見られるばかりである。

こうして、政治上経済上の「中央集中」に加えて、教育上の「中央集中」が、ますます東京都の人口をマンモスのようにふくれ上らせている。東京の国立大学ばかりでなく、伝統のある私立大学に学生が殺到する。ラッシュアワーに交通機関に乗れば、この大学の制服をつけた若人の巨大な群に圧倒される。

なぜそういうことになったのか。答えは簡単である。官庁にしろ、大企業にしろ、東京の大学の卒業生たちによって指導されている。いわゆる「学閥」が存在している上に、官庁でも、大企業でも、中央で採用されたものでなければ、東京在住のコースを上に進んでいけないからである。多くの大企業は、さてまた中企業も、地方大学にはあまり求人申込みをしない。地方の支店や地方官庁につとめたものは、中央のトップ・レベルとの連りをもてないで、地方止まりで一生を終るほかない。東京で採用されたものは、一定期間地方の支店その他に勤務することがあっても、やがてよほどのことがないかぎり「中央」へもどってくることができる。こういう状況がはっきりしていれば、多くの野心的な青年たちが、東京遊学を志し、東京の大学に殺到するのは、考えてみれば当然だろう。

それに、東京は、いってみれば文化の流行的尖端である。地方文化の独自な特色は、次第に巨大なマス・コミの中に圧倒されて失われている。かりにその特色が、省みられても、それが一度マス・コミに着目されて、その網にすくいあげられると、「東京的」粉飾をほどこされて、地方へ逆輸出される。「南国土佐」のような民謡などが

そうだ。

「文化生活」に魅力を感じるのは、若い人たちには当然だから、男女の学生が東京に定住しようとおもうのもまた当然である。東京在住ということが、明治以来長い間の「立身出世」のシンボルだったことも、それに拍車をかけている。それには、東京の大学を卒業するのがいちばん有利である。東京の大学に入学できるように、これまた東京の高校にいかなければならない、という気持が、子どもにも親たちにもあるらしく、私の知っている範囲にも、親もとを離れて、東京の高校に来ている生徒たちが少くない。

こうして、いやが上にも、東京の人口はふくれ上っている。これでよいのだろうか。私はここでは、交通や住宅の問題を論じようとは思わない。ただ、こういう、状態を放置していて、教育的にどういうことになるのだろうかという問題だけは、ぜひとも考えなくてはならない。

国立や都立などの学校は別だとしても、学校というものが企業としてなり立っているかぎり、多くの志願者や入学者を迎えれば、それは成功だということになる。なにごとも企業の世の中であり、その成否で、結果がはかられるとすれば、私立の大学・高等学校そして各種学校が、大ぜいの学生・生徒をかかえて、繁昌するのは好ましい。

私はもちろん、そういう大学や学校には教育的配慮が皆無だなどという不遜ないい方をしているのではない。国立や都立の学校より、文化的にも高い貢献をしてきたそういう学校がたくさんある。しかし、基本的に、現代の社会では、学校は企業として成り立っていかなければならないという面をもっている。そこで、採算をとるためには、どうしても、過剰な人員を収容しないことにはやっていけない。これは授業料や寄附ということを考えれば、経済的収支計算から明確な事実である。

学校は、学生にとって、そこで一日を勉学にすごす学園とはほど遠くなる。(国立や公立がその点でとくによいわけでもない。)過剰な学生の大群は、指定された時間がすぎれば、街に氾濫する。街は街で、そういう学生の大群を顧客として、企業を成り立たせている。そこには若い人たちをひきつけようとねらっている刺戟が渦を巻いている。学校は、静かに生活を楽しむ場所ではない。寄宿舎もまれである。学生たちは外へ出るほかないのである。

住宅難や経済事情から、学生たちの下宿の部屋も狭く、特別な境遇にあるものをのぞいては、二、三人で一室に同居しているのもまれではない。こんな状態では、下宿で、ゆっくり勉強をしたり、生活を楽しんだりすることは思いもよらない。少しの時間でも、外で暮すことになり、それがまた街の雑踏の原因にもなる。

恐らく東京の街ほど、学生がたくさんいて、そして非教育的な都市は世界にないだろう。たとい、学校が教育的配慮をしたとしても、それは限られた結果しか得られない。私の知っているある大学の教授は、こんなことを話していた。新学期早々、地方から出てきた学生が、どこと行く当てもなく、盛り場を歩いているうちに、むらむらと反感が起ってきて、こともあろうに、その反感を、人通りの絶えたところで、出会った老人に向けて、その老人に暴行を加えてしまったというのである。これといってとくに悪意もなく、物と

りという目的でもなく、都会の刺戟と、それを適当に受け入れる方法も知らない未経験と都会生活に馴れない自分に対するムシャクシャした気持から、これという理由のない反感を爆発させてしまったとしか説明のつかない所業だった。

こんな事件は多くはない。しかし都会の刺戟に適当に馴れていくということは、「事件」を起こさないだけ、青年たちの心を隠微にむしばんでいるのは確かだ。これが慢性的な不道徳をつくり出し、悪への不感症の原因になっていないとは保障しがたい。

むしろ、私たちは、こういう教育環境で、健全な青年たちが育っていることの方に驚嘆すべきかもしれない。しかしかれらは案外健全だということでかれらに委しきって、私たちが何も努力しないでいてよいはずはない。

その対策となると、私には、すぐには考えもつかない。この原因はよってくるところが遠いのだ。その根本まで遡ることがなければこういう状況を解決することはできない。

しかし、その目標は、やはり東京都が、計画的な教育的環境、つまり文教地区の整備にどうすれば成功するかを考えることだと思う。私は卒直にいって、大学と学生が多すぎると考える。それは、大学などを出なくても、十分にその技能と人間を磨いていけば、世の中で安定した暮しと、それにふさわしい誇りをもてるような社会にならなければならない。これは大へんな精神革命と同時に、社会の変化を必要とする。しかし、教育的配慮の側からいえば、教育的環境を整えて、学生たちに、勉強のための静かな温い配慮の行きとどいた清潔な住居を提供してやることが必要だ。そして、スポーツや読書や劇や映画の鑑賞にも十分な設備がととのっていればどんなにかれらの青春は楽しいだろう。そして、そこから新しい清潔な日本人が生まれるにちがいない。

だが、これも現在では夢のような話である。しかし、世界には、これが夢でなくなりつつあるところもあるし、アメリカあたりの大学では、そういう環境をもっているようだ。私たちだけができないというわけはなさそうだが、現在では当分夢としておこう。もちろん、いつかは実現できる夢としてである。

二

数年前に、イギリスのグラスゴー大学の経済学の教授夫妻が日本に来たことがある。その夫人のほうは、教育の問題に興味をもっていて、とくに日本の中等教育を知りたいということだった。私は、頼まれて、公立中学校を案内することにした。

一つは、東京北部の工場地帯の○中学校、もう一つは、ある公団アパート地区のモデル中学校という対照的な学校を選んで案内した。○中学校は、最近では漸く鉄筋コンクリートの新しい校舎が建つようになったが、当時は、地盤沈下のため、廊下は陥ちこんでゆがみ、二階にあがる階段の手すりもグラグラと動くほどの老朽危険校舎であった。死の危険さえも感じられる恐ろしいものだった。図書室といえば、古い屋内体操場をベニアで区切って書架などをならべてある。外の騒音は遠慮なく閲覧室に流れこんでくる。

こんなところで、よくも勉強できるものだと感心すると同時に、建物が倒れて、子どもたちや先生にもしものことがあったらと、それも心配だった。排水が悪くて、校庭には汚水が溜まり、その水に

は油がギラギラと浮いている。衛生という点でも感心しない。子どもたちの遊んでいるボールが水溜まりにころがる。かれらはそれを手でつかんで投げ合う。

こういう学校の校長室で、イギリス夫人と先生たちとの会話がはじまった。この学校は、その二、三年前は、一学級の子どもの数が最高八十数名になっていたことがある。私がその学校の近くの父母たちの集りに招かれていったとき、ある母親が、「うちの子は最近お行儀がわるくて困ります。女の子のくせに机の上を渡り歩くのですからね」と訴えられた。よくきいてみると、その中学校の生徒だった。しかし、もっとよくきいてみると、八十数名の学級では、机がびっしりと並んでいて、自分の席につくのには机の上を渡っていかなければならないというわけなのである。

しかし、イギリス夫人を案内したときには、いくらかよくなっていた。それでも一学級の子どもが六十数名というのである。イギリス夫人は、「一学級の子どもは何人ですか」とたずねて、通釈を通じて「六十数名」という答えをきいて、自分の耳をうたがってか、あるいは通訳の誤訳と思ったのか、なんべんも「私がきいているのは一クラスの人数です」とくりかえして通訳にいっている。そこで、私が、確かに一クラス六十数名だと横から口を出して、漸く疑問をくりかえすのはやめたが、信じられないような顔をしていた。

そこで、じっさいに授業をみることにした。なるほど一杯つまっている。授業は工作の時間だったから、余計そうなのだろうが、先生がどこにいるかわからぬほど、三年生の大きな子どもたちが図工室に一杯になっている。それをみたかの女は、「これはクラスというものではない。群集だわ。」といって驚嘆していた。

ついでだが、イギリスでは法律で中学校は三十人以下ということになっている。統計でみると、二十名前後の学級が一ばん多い。最高が三十名である。平均ではない。こういうところからみると、東京の学校はたしかに過大学級であり、これを「群集」とよびたくなる気持もわかる。

その後はだいぶよくなったとはきいているが、しかし、六十名以上のところもまだなくなってはいない。三十名と六十名とを比較してみれば、全く算術的に計算してみても、教師が子どもに話しかける回数も時間も二倍になる。ところが、じっさいは、教育的効果は二倍どころではない。イギリスでは、父母たちは、校長が全部の子どもを覚えられるぐらいの数の学校でないと子どもを入れたがらないという。子どもの数がそれ以上の学校（五百人以上）では、教育などはできないと考えているらしい。それには正当な理由がある。小学校の教師をしたことのある私の友人がいっていた。若い精力の絶頂にあったころでも、四十人までは、どうにかすべての子どもの名前と顔がおぼえられる。しかし、それから十人増すごとに、クラス全体がボンヤリしてくる。よく出来る子十人ぐらいと、困った子どもが十人ぐらいがわかる程度で、あとの二、三十人の存在はほとんどかすんでしまうものだ、ということである。とすると、五十人、六十人の学級をかかえている教師というものは、ほんとうに教育というものが責任をもってやれるものだろうか。

私は、最近の浅沼さんの事件から、戦後の教育を批判する声をきいて、かえって驚いている。何かことがあると、教育の責任を云々

しはじめる。しかし、いったいそういう人たちは、いままで、東京の学校の実情を知っていたのかどうかを反問したくなる。イギリスの議会政治のあり方を羨やんで、それを手本にせよとよくいわれる。それもいいかもしれないが、その基礎になっている民主的な国民づくりを委されている学校をいまのような状態に放っておいて、事が起るとすぐ騒ぎ立て、道徳教育がどうのこうのという前に、せめてイギリスの学校なみに、一クラス四十人(小学校)、三十人(中学校)以下の学校にするように努力してみたらどうだろうか。

そうすれば、教師の心から落ちこぼれてしまうような子どもたちは少なくなるだろうし、子どもたちは教師の温い配慮の中で生きる希望とはげましとを感じることができるだろう。いまのような状態では、多くの子どもが、教師の心から落ちこぼれて、街の刺戟のジャングルの中に放置されている度合いは大きくなる。家庭が受けとめてくれればしあわせだ。しかし、住宅難から、足の踏み場もないような家では、子どもの足は外へ向う。性格の弱い子は、荒さんだ行為の中で、英雄主義的なあこがれをもたなくては生きていけなくなる。なかまを求める。「理解してくれるなかま」が右翼のテロリストたちだったらどうか。私はそんなことを考える。

三

これに加えて、入学難をどうにかしたいものだと思う。東京ではじまった試験準備教育は、同心円を描いて進む波のように地方へ拡がって行き、それが交錯し反射し合って、また東京へはねかえってくる。中学校ばかりでなく、はなはだしいのは小学校まで、入学準備教育に浮身をやっしている。学校の先生の方からいえば、親の要求だというだろう。親の方からいえば、よその学校でもやっているのだから、負けないようにやって欲しいと考えるだろう。そのよその学校は、親から頼んだのか、先生が自発的にやりはじめたのか、ともかく、これはおよそ教育などというものではない。しいて名づければ、競馬の馬の調教に近い。練習をしながら、テストまでにコンディションを整えるところまで似ている。

なぜ教育とはいえないのか。こうして詰めこんだ知識は、決して身についたものにはならない。子どもたちは、物ごとを探究して、ほんとうの正しい知識を得ようという学習意欲をもって勉強しているのではない。心理的にもノイローゼ症状をひき起しかねない。不眠症的傾向を訴える子どももいる。だいいち、発達ざかりの身体にそれらは有害である。それだけではない。その競争は決してみんながいっしょに高まっていこうという精神には支えられていない。だれか一人が成功することは、だれか他の一人が不成功に終ることを必ずともなう。「万人は万人の敵」という状況をくり出す。どうして道徳性を高めることができようか。

もっとわるいことには、そういう配慮を学校から受けない子どもたちの精神状態は暗く、絶望的なものに転化しやすい。非行がこの準備教育と関係がどれだけあるか、十分な調査はなされていないようだが、私のまわりの小さい経験では、無関係とはいい切れない証拠がある。二、三年前私の近所のある中学校で補習授業を止めた(それには多くの人の務力があった)年には、例年起りがちな卒業間ぎわの中学生たちの乱暴な行為が皆無となり、附近の警察でもそれを認めたほどであった。

こういう状況にもかかわらず、希望のところに行けなかった子どもたちが、たとえこの数はきわめてわずかでも、それを苦にして自ら高い生命を絶つという現象もなくなっていない。

これは、どこかから狂ってきた証拠である。そして、どこかで、この悪循環を断っていきたいものである。私は、単なる感傷で、試験のない楽しい社会がすぐにでも出来るように思い描いているのではない。試験のない国などはあるまい。またそれがよいわけでもない。しかし、余計なことがやられすぎている。しかもやられすぎた結果は、この世の害悪が増大こそすれ、減っていないのである。先にのべた補習教育を止めた中学校では、その年、いわゆる進学率は低下するどころか、かえって高くなった。高くなったのは偶然だろうが、補習授業が、ほとんどそれには関係しないということは確からしい。もちろん、それに注ぐ努力の何分の一かが、正規の授業の改善に用いられることを前提としてである。

私は、さっき、イギリス夫人を中学校へ案内したことを書いたが、もう一つの山手の学校、中学校でも一つの経験をした。私はじっさいに中学校へ行く前に、かの女に予備知識を与えておいた。日本の公立中学校は、きまった学区域をもっていて、そこの住民の子どもたちが通学することになっているということ、そして公立中学校は義務学校としてて無償であるということ、をかの女に説明しておいた。

ところが、困ったことに、T中学校の案内の先生は、この中学校は、高校進学の成績がよいので、北は北海道から南は九州のはてにいたるまで、入学希望者があり、それをさばくのに大へん骨を折っているということを、半ば得意気に話された。もちろんそういう子どもたちはこの学区内に寄留して入学してくるのである。

まず、このことにかの女は引っかかった。そして私の方を向いて「さっき説明してくれたことと、ちがうではないか。この学校は公立学校だというのに、日本全国から子どもが入っているではないか。学区域などはないではないか」という反問である。私は、さっきの説明は、「原則」をいったので、寄留という手で、じっさいには、学区域外からもこの学校のように子どもが来るのだと釈明した。

もう一つかの女がひっかかったのは、PTA会費とさまざまな父母負担の費用のことだった。これにも、「あんたの説明とはちがうではないか。公立学校は無償なはずではないのか」ときたのである。私はまた「原則として、」ということばをくりかえしたので、かの女は「あんたは、いつも原則、原則といっている」と笑い出した。私の気持はちょっと笑えない複雑なものだった。

なぜ、こんなに「原則」と「現実」とがちがうのか。だれもが、寄留というものが、「原則」を破るために用いられる手だということは百も承知している。そして、それを形式的に合法的なものとして承認し、「合法的なんだから仕方がない」と考えている。こんなおかしなことがあるだろうか。原則には、現実では例外が出る。これを認めるのが現実的である。ところが、ここでは「合法的」という形式性で、折角教育的に配慮した原則がふみにじられ、しかも、みんながそれを承知の上で「仕方がない」としている。それは例外ではなくて、原則の不承認にすぎないのだと私は考える。

これを、どうして止めることができないのだろうか。東京都民の

税金でまかなわれている学校に、他の地方の住民の子どもが、合法的にはいってくるのを都民がだまっていてよいというのだろうか。またもし人口に見合うように計画的に学校配置ができているとすれば、それをこの計画に支障を来たしてまで、特定の公立学校に子どもたちが殺到するというのは、教育的にみても、遺憾である。

こういうことが起るのは、一つには学校差の問題があるからだと思う。私は実質的に学校差があることを否定する勇気はない。しかし、じっさいの学校差よりも、もっと心理的に増幅されている世間の認識を恐ろしいと思う。一種の流言ひ語に近い。

学校差があるとして、遠い地方の家庭が、子どもだけを親戚や知人にあずけて都会に放り出すことの非教育性を考えてみることも必要だ。中には母親が、父親と離れて、そのために東京に移り住んでいるという話もきく。これもまた「教育熱心」にはちがいないが、じつは夫婦が別居しているというもっとも危険な家庭的状況をつくり出しているとしか思えない。

なによりも問題なのは、「条件の悪い」と考えられる地方の学校から「よい学校」を求めて東京へ子どもを出すことのできる家庭は、これは特別な家庭であるということだ。そうでない家庭の子どもたちは依然として「条件の悪い」学校に置いておかれている。一般の住民は、逃げ出すことはできないのである。折角の教育の機会の均等はこんなところから破れていく。もし、そういう「熱心」な親たちが、ほんとうに教育的であるならば、なぜその地域の学校をよくするためにそこで努力しないのだろうか。自分の財力で自分の子どものことだけを解決しようとして、一方ではその地方の教育を引き上げることを怠り、他方では東京都民の税でまかなわれる教育を攪乱する結果になる。二重の意味で市民道徳に欠けた所業だといわなければならないだろう。

私は、これを東京都民のために、断乎として解決して貰いたいと思う。一つは学校に対してそれを要求し、もう一つは都の教育庁や都議会に要求したい。

恐らく学校の先生は人情家が多いから、頼まれれば同情して、拒否するにしのびないというかもしれない。そして正当な寄留で合法的な手続きをとっている人たちの中には、いろいろな事情で転入を必要とするひともあるかもしれない。だから、それを拒否一点張りで解決することはできないというかもしれない。

教育委員会も同じように感概を述べるにちがいない。そこで私は提唱したい。この転入の理由を審査する委員会を都につくって貰いたいということである。そのメンバーは、都会議員、区会議員、教育委員、および、調停委員のように一般の都民から数名を選ぶ。そして、全部のそういう学区外転入の理由を審査し、十分の理由が認められないときは、モグリ転入の目的だと判定して、これを拒否する。こうすれば、ある程度まで公正に判断できるし、学校や教育庁の人情家たちを悩まさないで、しかも不合理を是正できるだろう。

四

ことのついでに、二、三まだ文句をいわせてもらいたいと思う。それは、一つは、公立学校の新規建築に、住民の寄附で予算の「よだれ」をするという習慣があるらしいことだ。これは私の子どもの通っている学校でもきかされた。私はこの悪習がまだあるなら、早

く根絶しなければならないと考える。

公教育というのは、なによりも公費による教育のことだ。昔からの習慣なのだが、この寄附による公立学校の建築や施設は、篤志家の自発的寄附はもちろん喜んで受けてもよいが、なかば強制的な寄附は都民に不信感を強めるようになるだろう。今の小樽商科大学、昔の小樽高商は、その出発に当って、市の素封家が土地を寄附して文部省が学校を建てるというやり方だった。丘の上なので、整地の費用もかかるから、それも出してもらえば認可する、と文部省がいったとか、いわないとか、伝えられている。これは特志家の寄附によって国立の学校が建った例である。こういう例は大へん多い。もちろん、これはこれでよいと思う。

しかし、これが当り前と考えられて、小・中の義務校まで「よだれ一寄附をやるというのは弊害が大きすぎる。子どもが肩身の狭い思いをしないようにムリする親はまだあとを絶たないだろうし、こういうことを世話する人が「教育悲心」ということになっては情ない。地区の子どものために篤志家が寄附したいというなら、有難くちょうだいしてその公共心に感謝するのは当然だが、体育館や講堂などを、集団寄附をつのってやるとそれが「よび水」になるということをきくと、私などは教育委員会は、合理的な見地から、年ごとに順次に全体を整備していくという計画にむしろ支障をきたすのではないかと心配する。あるところでは「よび水」ができたから早くする、あるところは、何もないから、あとまわしだということになると、教育的に合理的な計画は立たないことになる。そういう寄附などなくし、公費でちゃんと建つ学校もあるのだから、この辺がどうなっているのか、私はよく知りたいと思う。

話はちがうが、学校の拡声機を通して流れるチャイムや区役所の愛の鐘にも私はいく分かの問題を感じている。一つは、スピーカーの音質の悪さがどうにかならないかということである。これは予算の関係もあろうが、一般によくない。しかし先生も少々無神経ではないかという気もする。恐らく先生は子どもたちのあげる喚声に、いい加減馴れっこになっているのだろうが、学校は周囲に必要以上のボリウームでスピーカーを通じてさまざまな音を流している。しかもその音質が悪いときている。チャイムの音程が狂っているにいたっては、少々「子どものためだ」「教育のためだ」と思いながら気がいらだってくる。

とくに心配なのは、ああいう音質をたえずきかされている子どもたちは、一方で音楽の時間に、いわゆる芸術教育をほどこされても、一こう効果がないのではないかと疑わしくなる。長い間には、音感美も鈍磨してしまうのではないかと心配だ。

区役所の「愛の鐘」では、勉強家の学習との間に悶着が起って新聞にも出た。これにも音程の狂っているやつがある。神経質のひとには堪えられまい。

つまり、ここには、一つの独善的心理が根本にあるようだ。学校は「教育的な仕事、つまりよいことをしている。だから周囲には少々騒しくても、許さるべきだ」と考えがちである。(私も教師なのついそういう独善に陥りがちなので気をつけている。)

区役所の「愛の鐘」もまことによい思いつきである。だからそれを少々うるさいと考える人間があっても、そういう人間は我慢して

貰おう、よいことなのだから、という気持である。

これはやはり、反省すべきだと思う。それでなくても、東京という大都会には音が多すぎるのである。密集した街の中で拡声器で音を出すのには、よくよくその影響の及ぶ範囲について調査研究をして貰いたいと思う。

住民の方（かくいう私もそうだが）も、ほんとうは、けんか腰でなく、学校なり、教育委員会なり、区役所なりに話をもちこんで、そっくり調査して貰うぐらいの市民精神をもつことが必要なのだと思う。

ところで、じつは、それがなかなかできないのは、水掛論に陥りそうだという予想があるからである。つまり、神経にとって、害があるかどうかを判定することがむずかしい問題なのである。

そこで私はこれについても、じつは調査委員会のようなものをつくって貰いたいと思う。とにかく音というものは、万人のものである空間の空気をゆりうごかすのだから、かってにいろいろな種類の大きな音を出して、相手の耳を刺戟してはいけないという規則を立ててもらいたいと思う。騒音防止法さえある世の中なのだから、学校や区役所といえども、その例外ではない。ただ、学校や区役所の出す音は、「教育的」、「公共的」という目的がついているので、その目的にふさわしい音かどうかを、都にしかるべき委員会を設けて、いろいろ判定をしてもらいたいものだと思う。

私は、いろいろな文句ばかり並べた結果になった。しかし。私は東京で生まれ、そして東京で育って、東京都を愛している。そして教育のことを専門に研究する仕事をしている。こういうわけで、もっと東京都とその教育をよくしたいという念願で、改善できたら、という点を遠慮なくあげつらってみた。

もちろん、提案には多分に空想的なところもある。しかし、これは不可能であろうか。沢して不可能だとは私は考えない。なぜならこういう欠点をもっていない、あるいは克服した場所が世界にはあるからである。ほかの国の人間にできて、私たち日本人にできないものがあるだろうか。あるという根拠はなにもない。

私は、そういう自負をもっている。